

『バガヴァッド・ギーター』における 悪について

山本和彦

I 問題の所在

インドの大叙事詩『マハー・バーラタ』(Mahabharata)の一部分を構成し、紀元前後のインドで成立したヒンドゥー教の聖典『バガヴァッド・ギーター』(Bhagavadgīta)のなかで、何が悪と考えられていたのであろうか。本稿では、『バガヴァッド・ギーター』¹⁾のなかで見られる悪²⁾の意味を含むことばの内容について考察する。

II 悪を意味する語

『バガヴァッド・ギーター』のなかで、悪を意味する語のうち、使用例すべてが悪を内容としているのは、「パーパ」(pāpa)³⁾ 16例、「ドーシャ」(doṣa)⁴⁾ 9例、「アシュバ」(aśubha)⁵⁾ 6例、「カルマシャ」(kalmaṣa)⁶⁾ 5例、「アダルマ」(adharma)⁷⁾ 5例、「キルビシャ」(kilbiṣa)⁸⁾ 4例、「アガ」(agha)⁹⁾ 2例、「パープマン」(pāpman)¹⁰⁾ 2例、「パータカ」(pātaka)¹¹⁾ 1例、「ヴリジナ」(vr̥jina)¹²⁾ 1例、「アクシャラ」(akuśala)¹³⁾ 1例などである。また、悪、困難を意味する接頭辞(duṣ-)がついた単語は、「ドウシユクリット」(duṣ-kr̥t/-a/-in)¹⁴⁾ 3例、「スドウルアーチャーラ」(su-dur-ācāra)¹⁵⁾ 1例、「ドウルガティ」(dur-gati)¹⁶⁾ 1例などである。複数回使用されるが、そのすべてが悪を意味するわけではない単語は、「アサット」(asat)¹⁷⁾ 10例などである。

このうち、「パーパ」(pāpa)は、悪を意味するサンスクリット語のなかで最も一般的な単語であり、『バガヴァッド・ギーター』のなかでも悪の観念

をあらわすのに最も多く用いられている。「ドーシャ」(doṣa)は悪というよりも、過失であるが、悪の意味が含まれている。「アシュバ」(aśubha)は、浄(śubha)に否定の接頭辞(a-)が付いたものであり、直訳すれば不浄(aśubha)であるが、インドでは善・悪と浄・不浄との観念は重なる部分が多いので、内容的には悪を含む語である。「アダルマ」(adharma)は、『バガヴァッド・ギーター』のなかでの文脈では具体的な内容がはっきりしないが、サーンキヤ哲学では、悪い行為の余力、結果を内容としている。「アサット」(asat)は、存在する(√as)という動詞語根の現在分詞(sat)に否定の接頭辞(a-)が付いたものであり、直訳すれば非存在(a-sat)であるが、『バガヴァッド・ギーター』自身がこのことばの多義性について述べており¹⁸⁾、悪という観念も含まれており、おそらく2例が悪の意味で用いられていると思われる。

Ⅲ 内容分析

物語の展開を簡単に概観しておく。『バガヴァッド・ギーター』は、パーンダヴァ(Paṇḍava)五王子とカウラヴァ(Kaurava)百王子との戦争直前におけるアルジュナ(Arjuna)とクリシュナ(Kṛṣṇa)との対話という形をとっている。親戚関係にある両家が戦争を開始することに、パーンダヴァ第三王子アルジュナは疑問を持つ。アルジュナの御者であるクリシュナ(ヴィシュヌ神の化身)は、アルジュナに対して、自分の義務(svadharma)を果たすべきであるとアドヴァイスする。クシャトリア(kṣatriya)の生まれであるアルジュナにとって、正義の戦争を遂行することは義務である。クリシュナは悩めるアルジュナに対して、輪廻(saṃsāra)、業(karman)、アートマン(ātman)、ブラフマン(brahman)など人間と宇宙についての秘密を解き明かし、そして、祭祀(yajña)、行為(karman)、知識(jñāna)、信愛(bhakti)、瞑想(dhyāna)などあらゆる解脱手段(yoga)を述べる。最後にはアルジュナは悩みをすべて解消し、自らの義務を果たすためカウラヴァ百王子と戦う決意をする。

物語は、戦闘配置の描写から始まる。この描写は、読者を退屈させるが、第2章以下を引き立たせる効果を持っている。導入部分は、第2章第10詩頌まで続き、そこまでで見られる悪の観念は、すべてクリシュナに対するアルジュナの発言のなかにある。具体的にその内容を見てみよう。なお、和訳は原文のニュアンスが伝わるよう直訳にし、悪の観念を含む語はカタカナ表記にし、参考のために代表的な現代語訳（エジャートン¹⁹⁾、ゼーナー²⁰⁾）と最近の和訳（辻直四郎²¹⁾、上村勝彦²²⁾、鑑淳²³⁾）を註のなかで示すことにする。

nihatya dhārtarāṣṭrān naḥ kā prītiḥ syāḥ janārdana /
pāpam evāśrayed asmān hatvaitān atātayinaḥ // (1.36)

「ドリタラーシュトラの息子たちを殺して、私たちにどんな喜びがある
うか、人を悩ます者（クリシュナ）よ。彼ら弓を引く者たちを殺して、
パーパ²⁴⁾（pāpa）だけが私たちに残る。」

アルジュナはクリシュナに、一族を相手に戦争することはできないと言う。戦争において一族を殺すことは悪であるとアルジュナは考える。一番最初に出てくる悪を内容とする語は、アルジュナから発せられた「パーパ」（pāpa）である。ドリタラーシュトラの息子たちであるカウラヴァ百王子を殺すこと、つまり悪いことを行うことによって、アルジュナに残るものは何であろうか。おそらく輪廻（saṃsāra）の原因（kāraṇa）としての業（karman）であろう。ここでの「パーパ」（pāpa）の内容は、百王子を殺すことという悪い（pāpa）行為（karman）の結果（phala）、指向力（āśaya）、潜在的影響力（saṃskāra）、輪廻の原因（saṃsāra-kāraṇa）、輪廻の種子（saṃsāra-bīja）、仏教思想で言えば悪業、であると考えられる。

yady apy ete na paśyanti lobhopahatacetasāḥ /
kulakṣayakṛtaṃ doṣaṃ mitradrohe ca pātakam // (1.38)

「たとえ、貪欲で心が害された人々が、一族の滅亡によって作られた
ドーシャ²⁵⁾（doṣa）と友を傷つけるときのパータカ²⁶⁾（pātaka）を見なくても、」

ここでは、「ドーシャ」（doṣa）と「パータカ」（pātaka）という語が用いら

れているが、その内容は単なる悪ではなくて、悪い行為によって作り出された結果であり、第1章36頌での「パーパ」(pāpa)と同じ内容(悪行の結果)であると思われる。

kathaṃ na jñeyam asmābhiḥ pāpād asmān nivartitum /
kulakṣayakṛtaṃ doṣaṃ prapaśyadbhir janārdana // (1.39)

「一族の破滅によって作られたドーシャ²⁸⁾(doṣa)を見ようとしている私たちは、どうしても、このパーパ²⁹⁾(pāpa)から脱出するため〔の方法を〕知るべきではないか。人を悩ます者(クリシュナ)よ。」

ここでの「ドーシャ」(doṣa)も、悪によって作られたもの(行為の結果)であり、その直前の「パーパ」(pāpa)の言い換えである。パーパとドーシャは同内容であり、悪い行為の結果である。

kulakṣaye prapaśyanti kuladharmāḥ sanātanaḥ /
dharme naṣṭe kulaṃ kṛtsnam adharmo 'bhibhavaty uta // (1.40)

「一族が破滅するとき、永続してきた一族の法³⁰⁾(dharma³¹⁾)は消滅する。そして、法が消滅するとき、アダルマ³²⁾(adharma)が一族をすべて征服する。」

ここでの法(ダルマ)とは、教典に書かれている祭祀を實行することによって得られる果報であり、善い行為の結果である。アダルマ(adharma)とは、それを實行しないことによって、もたらされる結果であり、感官の対象に対する執着と無知の結果である³³⁾。従って、アダルマは悪い行為の結果であると考えられる。ここでは祭祀(yajña)との関連で悪行の結果が言われている。

adharmābhibhavāt kṛṣṇa praduśyanti kulastriyaḥ /
strīṣu duṣṭāsu vārṣṇeya jāyate varṇasaṃkaraḥ // (1.41)

「アダルマ³⁴⁾(adharma)による〔一族の〕征服から、クリシュナよ、一族のなかの女性たちは悪くなる。女性が悪くなる時、ヴリシュニ家の一員(クリシュナ)よ、種姓(ヴァルナ)の混合が生じる。」

ここは、第1章40頌の続きであり、アダルマ(adharma)の意味内容は、

前頌とまったく同じである。アダルマは、悪い行為の結果である。ここでも祭祀 (yajña) との関連で悪行の結果が言われている。

doṣair etaiḥ kulaghnānām varṇasaṃkarakāraikāiḥ /
utsādyante jātidharmāḥ kuladharmās ca śāśvataḥ // (1.43)

「一族の混血を作るものであり、一族の破壊者たちのこのドーシャ³⁵⁾ (doṣa) によって、永続してきた生まれの法 (階級制度) と一族の法は破壊される。」

一族の破壊者が持っており、それによって一族の法が破壊されるものとは、何であろうか。やはりここでもドーシャの内容は悪い行為の結果であると考えられる。

aho bata mahat pāpaṃ kartuṃ vyavasitā vayam /
yad rājyasukhalobhena hantuṃ svajanam udyataḥ // (1.45)

「ああ、大きなパーパ (pāpa) を行う決意をした私たちは、王の楽しみに対する貪欲という理由で、自分の一族を殺そうとしている。」

ここでは、「悪いことを行う」(pāpaṃ kartum) のか「悪い行為の結果を作る」(pāpaṃ kartum) のかどちらであろうか。一族を殺すという行為そのものは、悪行の結果を作るというよりも、悪を行うという行為と一致する。悪を行った結果として、悪行の結果ができるのである。したがって、ここでのパーパの内容は、一族の殺害という悪い行為、もしくは悪である。

kārpaṇyadoṣopahatasvabhavaḥ pṛcchāmi tvāṃ dharmasāmmuḍha-
cetāḥ /

yac chreyaḥ syān niścitaṃ brūhi tan me śiṣyas te 'haṃ śādhi māṃ
tvāṃ prapannam // (2.7)

「[私は] 哀れみ³⁷⁾のドーシャ³⁸⁾ (doṣa) ³⁹⁾によって傷つけられた自分の状態を持ち、[クシャトリヤとしての自分の] 義務 [の遂行] を迷う心を持っている。どちらがよりすぐれているのかを私はあなた (クリシュナ) に問う。きっぱりとそれを私に言ってくれ。私はあなたの弟子である。あなたに跪いている私に命じてくれ。」

「哀れみ」とは、一族を殺すことを象徴的に述べたものである。「ドーシャによって傷つけられた自分の状態」とは、一族を殺害するという悪を原因とする悪い行為の結果が自分を傷つけるという意味である。そう考えれば、ここでのドーシャは悪行の結果である。

以上の導入部分はすべて、アルジュナの発言中の悪の観念であった。以下、物語は本格的に始まる。クリシュナは輪廻 (saṃsāra) と個人的主体 (atman, dehin) についての真実を述べる。肉体が減びても、個人的主体としての魂 (アートマン, デーヒン) は不滅であり、それゆえ一族を殺しても減びるのは肉体だけであり、個人的主体 (アートマン, デーヒン) は輪廻を続けるのである。したがって、人が死んでも、それは肉体が減しただけであり、永遠⁴⁰⁾の別れではなく嘆き悲しむ必要はない。クリシュナの最初の悪についての言及を見てみよう。

atha cet tvam imaṃ dharmyaṃ saṃgrāmaṃ na kariṣyasi /
tataḥ svadharmam kīrtiṃ ca hitvā pāpam avāpsyasi // (2.33)

「しかし、もしあなた (アルジュナ) がこの義務である戦いを行わないとすれば、あなたは自分の義務と名声を捨てて、パーパ⁴¹⁾ (pāpa) を得るだろう。」

これは、先ほどのアルジュナからの問いかけに対するクリシュナからの回答である。ここでの「パーパ」(pāpa) は、義務 (dharma)、名声 (kīrti) と対比させられており、悪そのもののことが言われているようにも考えられるが、「義務を行わなければパーパを得る (pāpam avāpsyasi)」と言われ、第2章38頌では「戦争 (義務) を行ってもパーパを得ることはない (naivaṃ pāpam avāpsyasi)」と言われている。そして、次の39頌で「業の束縛を捨てる (karmabandham prahāsyasi)」と言い換えられており、第2章33頌、38頌、39頌との関連性を読みとれば、悪い行為の結果であると思われる。ここでは、自己の本務 (svadharmā) との関連で悪行の結果について言及されている。

sukhaduḥkhe same kṛtvā labhalābhau jāyajayau /
tato yuddhāya yujyasva naivaṃ pāpam avāpsyasi // (2.38)

「楽と苦、得ることと失うこと、勝ちと負けを同じと考えて、あなたは戦いに参加しなさい。そうすれば、あなたはパーパ⁴²⁾ (pāpa) を得ることは決してない。」

クリシュナはアルジュナに戦いに参加するようにアドヴァイスする。しかし、勝ち負けを同じと考えなければならないのである。クシャトリヤの義務が戦争の実行であることは、アルジュナにも理解できたであろう。しかし、戦争において勝負を度外視するとはどういうことであろうか。ここでは、結果に執着せずに行為するという行為の手段、カルマ・ヨーガ (karma-yoga) が説かれており、それを実修することによる解脱が目指されている。結果を思い煩うことなく自分の義務に専念すれば、たとえ一族を殺しても悪行の報い (結果) を受けることはない。ここでの「パーパ」 (pāpa) は、33頌、39頌との連続性を考慮すれば、解脱の阻害要因としての悪行の結果と解釈できる。ここでは、カルマ・ヨーガ (行為という手段) との関連で悪行の結果が言われている。

buddhiyukto jahattha ubhe sukṛtaduṣkṛte /

tasmād yogāya yujyasva yogaḥ karmasu kauśalam // (2.50)

「統覚によって [カルマ・ヨーガに] 専念する人は、善くなされたものとドゥシュクリッタ⁴³⁾ (duṣkṛta)⁴⁴⁾ の両方をこの世で捨てる。それゆえ、あなたは [カルマ・] ヨーガに専念しなさい。ヨーガは行為するときの技術である。」

ドゥシュクリッタは、直訳すれば、「悪くなされたもの」という意味であり、悪くなされた結果である。悪行の結果を捨てることは理解できるが、善くなされた結果までなぜ捨てる必要があるのだろうか。ここでのヨーガも、カルマ・ヨーガ (karma-yoga) ⁴⁵⁾ であり、瞑想としてのヨーガではない。行為するときに、善い、悪いという価値判断を避けることがカルマ・ヨーガ (行為の手段) の本質なので、ここでは善悪両方の結果を想定することを捨てることがアドヴァイスされるのである。⁴⁶⁾ それゆえ、「ヨーガは行為するときの技術」と言われるのである。ここでも、カルマ・ヨーガとの関連で悪行の結果が言

われている。

yaḥ sarvatrānabhisnehas tattat prāpya śubhaśubham /
nābhinandati na dveṣṭi tasya prajñā pratiṣṭhita // (2.57)

「すべてに対して、執着がなく、あらゆるシュバ・アシュバ⁴⁷⁾ (śubha-
aśubha)⁴⁸⁾を得ても、喜ばず、憎まない人の智慧は、確立している。」

シュバとアシュバは、直訳すれば浄と不浄であるが、ここでは相対を離れて行動するカルマ・ヨーガのことが言われているので、善・悪の内容を持っていると思われる。ある行為をすると、その行為の動機が結果として残る。欲望 (kāma)、怒り (krodha)、貪欲 (lobha) などに基づく行為にはその悪い行為の結果が残る。行為の結果を想定し、それに執着せずに実行された行為に結果、指向力、潜在力は残らない。悪い行為によって悪い結果が得られる。したがって、シュバは善い行為の結果、アシュバは悪い行為の結果であると思われる。ここでも、カルマ・ヨーガ (karma-yoga) との関連で悪行の結果が言われている。

yajñaśiṣṭāśīnaḥ santo mucyante sarvakilbiṣaiḥ /
bhuñjate te tv aghaṃ pāpā ye pacanty ātmakāraṇāt // (3.13)

「祭祀の残りを食べる善人は、すべてのキルビシャ⁴⁹⁾ (kilbiṣa)⁵⁰⁾ から解放される。しかし、自分のために料理するパーパ⁵¹⁾ (pāpa)⁵²⁾ はアガ (agha) を食べる。」

ここでは、祭祀 (yajña) による解脱 (mokṣa) が述べられている。ヴェーダ (veda) の伝統を『バガヴァッド・ギーター』の作者は否定することなく尊重する態度が見られる。パーパは善人 (sat) と対比させられており、悪人を意味することがわかる。善人は悪い行為の結果から解放され、悪い行為を行う悪人は悪い行為の結果を食べることになる。キルビシャとアガはともに悪行の結果である。ここでは、祭祀との関連で悪行の結果と悪人とが言われている。

evaṃ pravartitaṃ cakraṃ na anuvartayatīha yaḥ /
aghāyur indriyārāmo moghaṃ pārtha sa jīvati // (3.16)

「このように（五官を超えて）回転する車輪を回転させず、感官による楽しみを持つアガーユ⁵³⁾（aghāyu⁵⁴⁾）は、〔解脱できずに〕無益に生きる、プリターの子よ。」

感官によって外の対象に執着する者がアガーユ（aghāyu）であると言われている。執着することによって悪行の結果が残る。悪い結果を持つ者は、悪人である。アガーユは悪人である。感官の制御を行わない者が悪人であると言われている。感官の制御はカルマ・ヨーガにとって必要なことである。ここでは、カルマ・ヨーガとの関連で悪人について述べられている。

atha kena prayukto ayam pāpam carati pūruṣaḥ /
anicchann api vārṣṇeya balād iva niyojitaḥ // (3.36)

「それでは何が原因で、この人間はパーパ⁵⁵⁾（pāpa⁵⁶⁾）をなすのか。望んでいないのに、ヴリシュニ家の一員（クリシュナ）よ。まるで〔何かの〕力に駆り立てられるように。」

ここは、クリシュナに対するアルジュナからの質問である。なぜ人間は悪を行う（pāpam carati）のか、悪の原因（prayukta）は何かとアルジュナはクリシュナに問う。ここでのパーパは悪、もしくは悪行である。

kāma eṣa krodha eṣa rajoguṇasamudbhavaḥ /
mahāśano mahāpāpmā vidhy enam iha vairiṇam // (3.37)

「それ（悪の原因）は欲望であり、それは怒りである。激性（ラジャス）の要素（グナ）から生じたものであり、大きな食欲を持ち、大きなパープマン⁵⁷⁾（pāpman）を持つものである。これ（悪の原因）をこの世での敵と知れ。」

第3章36頌に対するクリシュナからの回答である。欲望（kāma）と怒り（krodha）が原因で、人は悪いことをする。そして、その結果が残る。欲望と怒りは限りがなく（大きな食欲を持ち）、大きな悪行の結果を結果として持っている（大きなパープマンを持つ）。したがって、パープマン（pāpman）は悪行の結果である。

tasmāt tvam indriyaṇy ādau niyamyā bhāratarṣabha /

pāpmānaṃ prajāḥ hy enaṃ jñānavijñānanaśanam // (3.41)

「それゆえ、あなたは最初に諸感官を制御して、バラタの牛（アルジュナ）よ、理論的知識と応用的知識を破壊するこのパープマン⁵⁸⁾（pāpman）⁵⁹⁾を殺せ。」

ここは37頌から続いている。悪行の結果を生じさせない具体的な方法が述べられる。それは感官の制御である。瞑想（dhyana）のヨーガもカルマ・ヨーガ（行為という手段）もともに感官の制御が必要であるが、ここでは第3章のテーマであるカルマ・ヨーガのことが述べられている。カルマ・ヨーガによって、欲望と怒りを制御する。欲望と怒りがなければ、悪行の結果は生じない。したがって、パープマンは悪行の結果である。ここでは、カルマ・ヨーガとの関連で悪行の結果が言われている。

yada yada hi dharmasya glānir bhavati bhārata /

abhyutthānam adharmasya tadātmanāṃ sṛjāmy aham // (4.7)

「実に、法⁶⁰⁾（dharma）⁶¹⁾の減少があり、アダルマ⁶²⁾（adharma）⁶³⁾の増加があるときにはいつも、バラタの子孫よ、私（クリシュナ）は自らを創造する。」

ここでのアダルマも第1章40、41頌と同じ内容であり、教典に書かれた祭祀を実行しないことによって生じる感官の対象に対する執着と無知の結果であると考えられる。アダルマ（adhama）は、悪い行為の結果である。ここでは祭祀（yajña）との関連で悪行の結果が言われている。

paritrāṇāya sādḥunāṃ vinaśāya ca duṣkṛtām /

dharmasamsthāpanārthāya sambhavāmi yuge yuge // (4.8)

「善人の救助のために、ドゥシュクリット⁶⁴⁾（duṣkṛt）⁶⁵⁾の消滅のために、そして、正義を確立するために私（クリシュナ）は各々のユガ期に現れる。」

ここでは、善人（sadhū）と対比させてドゥシュクリットということばが用いられている。ここでのドゥシュクリットは善人の対立概念である悪人である。

kiṃ karma kim akarmeti kavayo 'py atra mohitaḥ /

tat te karma pravakṣyāmi yaj jñātvā mokṣyase aśubhat // (4.16)

「『行為とは何か、無行為とは何か』ということは、詩人でさえも混乱する。この行為をあなた（アルジュナ）のために説明しよう。それを知って、あなたはアシュバ⁶⁶⁾ (aśubha) から解放されるだろう。」

人は何から解放される、つまり解脱 (mokṣa) するのであろうか。それは輪廻 (saṃsāra) からであるが、人を輪廻のなかに縛り付けているものは悪行の結果である。したがって、ここでのアシュバは具体的に言えば、悪行の結果である。ここでは、カルマ・ヨーガによる解脱 (モークシャ) という視点で悪行の結果が言われている。

nirāśīr yata cittatmā tyaktasarpaparigrahaḥ /

śārīraṃ kevalaṃ karma kurvan nāpnoti kilbiṣam // (4.21)

「欲望なく、制御された心とアートマンを持ち、すべての所有を捨てた人は、身体だけの行為をしながら、キルビシャ⁶⁸⁾ (kilbiṣa) を得ることはない。」

心とアートマンを制御するとは、カルマ・ヨーガのことである。カルマ・ヨーガによって避けることができるものは悪行の結果である。キルビシャ (kilbiṣa) は悪行の結果である。ここでは、カルマ・ヨーガとの関連で悪行の結果が言われている。

apare niyataharaḥ prāṇān prāṇeṣu juhvati /

sarve 'py ete yajñavidō yajñakṣapitakalmaṣaḥ // (4.30)

「他の者たち（ヨーガ行者）は、食物を制限し、出息を入息に捧げる。

これらすべての人々は、祭祀を知り、祭祀によってカルマ⁷⁰⁾ (kalma-⁷¹⁾ ṣa) が滅する。」

瞑想のヨーガ (dhyana-yoga) による解脱、祭祀による解脱が述べられている。解脱のために祭祀によって消滅させるものは、悪行の結果である。ここでのカルマ⁷⁰⁾ (kalmaṣa) は悪行の結果である。ここでは、瞑想と祭祀 (yajña) との関連で悪行の結果が言われている。

api ced asi pāpebhyaḥ sarvebhyaḥ pāpakṛttamaḥ /

sarvaṃ jñānaplavenaiva vṛjinaṃ saṃtariṣyasi // (4.36)

「たとえば、あなたがすべてのパーパ⁷²⁾ (pāpa)⁷³⁾の中で最高のパーパ⁷⁴⁾ (pāpakṛttama) であっても、まさに知識の船によってすべてのヴリジナ⁷⁵⁾ (vṛjina)⁷⁶⁾を乗り越えるだろう。」

ここでのパーパは両方とも悪人である。知識 (jñāna) によって消滅するのは、悪行の結果である。ヴリジナ (vṛjina) は悪行の結果である。ここでは、第4章のテーマである知識のヨーガ (jñāna-yoga) との関連で悪行の結果が言われている。

brahmaṇy ādhāya karmāṇi saṅgaṃ tyaktvā karoti yaḥ /

lipyate na sa pāpena padmapatram ivāmbhasā // (5.10)

「ブラフマンに諸行為を捧げ、執着を捨てて [行為を] なす者は、パーパ⁷⁷⁾ (pāpa) に汚されることはない。[汚] 水に蓮華の葉が (汚されない) ように。」

行為の結果を放棄し、執着を捨てる者が汚されないものは、悪行の結果である。ここでのパーパは悪行の結果である。第五章のテーマは行為の放棄という手段 (karma-saṃnyāsa-yoga) であり、行為の結果に対する執着の放棄を意味する。それはまたカルマ・ヨーガのことである。ここでは、カルマ・ヨーガとの関連で悪行の結果が言われている。

nādatte kasyacit pāpaṃ na caiva sukrtaṃ vibhuḥ /

aññānāvṛtaṃ jñānaṃ tena muhyanti jantavaḥ // (5.15)

「すべてに存在する者 (個人的主体) は、どんなパーパ⁷⁸⁾ (pāpa) もどんな善行の結果 (sukṛta)⁷⁹⁾も受け取らない。無知に覆われた知識によって、人々は迷う。」

善行の結果 (sukṛta) と対比されるここでのパーパは悪行の結果である。

tadbuddhayaḥ tadātmanas tannisthās tatparāyaṇaḥ /

gacchanty apunarāvṛtīm jñānanirdhūtakalmaṣāḥ // (5.17)

「それ (知識) を統覚として持ち、それをアートマンとして持ち、それ

を振り所として持ち、それを最高の道として持ち、知識によって振り落とされたカルマ⁸⁰⁾シャ⁸¹⁾ (kalmaṣa) を持つ者たちは、再び生まれ変わることはない。]

「再び生まれ変わることはない⁸²⁾」とは、再び身体に束縛されることがないということであり、輪廻からの解脱を意味する。解脱は悪行の結果の束縛からの脱出である。知識によって振り落とされるものは、悪行の結果である。ここでのカルマ⁸³⁾シャ (kalmaṣa) は、身体を束縛する原因 (kāraṇa) としての悪行の結果 (pāpātmaḥ karma) である。ここでは、知識のヨーガ (jñāna-yoga) による輪廻からの解脱という視点で悪行の結果が言われている。

labhante brahmanirvāṇam ṛṣayaḥ kṣīnakalmaṣāḥ /
chinnadvidha yatātmanaḥ sarvabhūtaḥ rataḥ // (5.25)

「消滅したカルマ⁸⁴⁾シャ⁸⁵⁾ (kalmaṣa) を持ち、断滅した疑惑を持ち、制御されたアートマンを持ち、万物の幸福を喜ぶ聖仙たちは梵涅槃を得る。」
涅槃 (nirvāṇa) ⁸⁶⁾ が得られるのは、悪行の結果が減ずるからである。ここでのカルマ⁸⁷⁾シャ (kalmaṣa) は悪行の結果である。ここでは、涅槃との関連で悪行の結果が言われている。

suhṅmitrāryudāsīnamadhyasthadveṣyabandhuṣu /
sādhuṣv api ca pāpeṣu samabuddhir viśiṣyate // (6.9)

「友、敵、無関心な者、中立者、憎むべき者、一族において、また善人⁸⁷⁾ (sādhu) においてもパーパ⁸⁸⁾ (pāpa) ⁸⁹⁾ においてもさえも同じ気持ちを持つ者は優れている。」

ここでは善人 (sādhu) とパーパ (pāpa) が対比されている。パーパは悪人である。「同じ気持ちを持つ者」とは、カルマ・ヨーガの実行者である。ここでは、カルマ・ヨーガとの関連で悪人が言われている。

praśāntamanasaṃ hy enaṃ yoginaṃ sukham uttamam /
upaiti śāntarajasam brahmabhūtam akalmaṣam // (6.27)

「なぜなら、静かなマナスを持ち、静かな感情を持ち、カルマ⁹⁰⁾シャなく⁹¹⁾ (a-kalmaṣa)、ブラフマンになるこのヨーガ行者に最高の喜びが近づく。」

ここでは瞑想のヨーガ (dhyāna-yoga) の実修による解脱が言われる。瞑想によってなくなるのは、悪行の結果である。カルマシャ (kalmaṣa) は悪行の結果である。ここでは、第六章のテーマである瞑想のヨーガ (dhyāna-yoga) との関連で悪行の結果が言われている。

yuñjann evaṃ sadātmanāṃ yogī vigatakalmaṣaḥ /
sukhena brahmasaṃsparśam atyantam sukham aśnute // (6.28)

「このように、常にアートマンに（マナスを）結びつけ、消滅したカルマ⁹²⁾シャ (kalmaṣa)⁹³⁾を持つヨーガ行者は、簡単に無限の喜びであるブラフマンとの遭遇に至る。」

ヨーガ行者が持っている消滅したものは、悪行の結果である。ここでのカルマシャ (kalmaṣa) は悪行の結果である。ここでも、瞑想のヨーガとの関連で悪行の結果が言われている。

pārtha naiveha nāmutra vināśas tasya vidyate /
na hi kalyāṇakṛt kaścid durgatiṃ tāta gacchati // (6.40)

「プリターの子（アルジュナ）よ、現世でも来世でも彼（ヨーガの脱落者）の破滅は見られない。なぜなら、善行者 (kalyāṇakṛt) は誰もドゥルガ⁹⁴⁾ティ (durgati)⁹⁵⁾へ行くことはないから。」

善行者が行かない場所は、善の反対概念である悪の道であろう。ここでは、ヨーガ行者 (yogin) との関連で悪の道が言われている。

prayatnād yatamānas tu yogī saṃśuddhakilbiṣaḥ /
anekajanmasaṃsiddhas tato yāti parāṃ gatiṃ // (6.45)

「しかし、〔感官が〕制御され、清浄なキルビ⁹⁶⁾シャ (kilbiṣa)⁹⁷⁾を持ち、多くの誕生によって完成したヨーガ行者は、苦行（ヨーガ）から最高の道（解脱）に行く。」

ヨーガ（瞑想）によって清められるのは、悪行の結果である。ここでのキルビシャ (kilbiṣa) は悪行の結果である。ここでは、瞑想のヨーガとの関連で悪行の結果が言われている。

na māṃ duṣkṛtino mūḍhaḥ prapadyante narādhamāḥ /

māyāpahṛtajñānā āsuram bhavam āsritaḥ // (7.15)

「ドゥシュクリッティン⁹⁸⁾ (duṣkṛtin⁹⁹⁾) であり、惑わされている最も低い人間は、私に帰依しない。幻(マーヤー)に知識を奪われた者たちは、魔(アスラ)的な状態に留まる。」

ドゥシュクリッティン (duṣkṛtin) は、直訳すれば悪行を持つ者であり、クリシュナに帰依しないものは、悪人である。ここでは、知識のヨーガ (jñāna-yoga) と関連して悪人が言われている。

yeṣāṃ tv antagataṃ pāpaṃ janānāṃ puṇyakarmaṇām /

te dvandvamohanirmukta bhajante mām dṛḍhavrataḥ // (7.28)

「しかし、清浄な業(カルマン)を持つ人々のパーパ¹⁰⁰⁾ (pāpa) は消滅しており、彼らは相対論の幻想から解放され、固い誓いを持ち、私を信愛する。」

清浄な業を持つとは、悪行の結果を持っていないことである。ここでのパーパ (pāpa) は悪行の結果である。ここでは、信愛のヨーガ (bhakti-yoga) との関連で悪行の結果が言われている。

idaṃ tu te guhyatamaṃ pravakṣyāmy anasūyave /

jñānaṃ vijñānasahitaṃ yaj jñātvā mokṣyase aśubhat // (9.1)

「しかし、私は悪意のないあなたのためにこの最高の秘密である理論的知識を応用的知識とともに教示しよう。それを知って、あなたはアシュバ¹⁰¹⁾ (aśubha¹⁰²⁾) から解放されるだろう。」

解脱は輪廻の束縛から解放されることである。人間を輪廻に束縛しているものは、悪行の結果である。ここでのアシュバ (aśubha) は、悪行の結果である。ここでは、輪廻からの解脱(モークシャ)との関連で悪行の結果が言われている。

traividyaṃ mām somapaḥ pūtapāpā yajñair iṣṭvā svargatiṃ prārthayante /

te puṇyam āsādyā surendralokam aśnanti divyān divi devabhogān // (9.20)

「3つ〔のヴェーダ〕を知り、ソーマ〔酒〕を飲み、清らかなパーバ¹⁰³⁾
(pāpa)¹⁰⁴⁾を持つ者たちは、祭祀によって、私(クリシュナ)を祀り、天
への道を願う。彼らは、清浄な神の王(インドラ)の世界に到着し、天
において神聖な神の楽しみを享受する。」

ヴェーダの知識、祭祀(yajña)という手段による解脱が言われている。解
脱を目的とするときに清められるべきものは悪行の結果である。ここでの
パーバは悪行の結果である。ここでは、祭祀による解脱(mokṣa)との関連
で悪行の結果が言われている。

śubhāśubhaphalair evaṃ mokṣyase karmabandhanaiḥ /
saṃnyāsayogayuktātma vimukto mām upaiśyasi // (9.28)

「このように、シュバとアシュバ(śubha-aśubha)¹⁰⁵⁾の結果である行為の
結果(業)の束縛からあなたは解放されるだろう。放棄によってヨーガ
に専念するアートマンを持つ解脱者であるあなたは、私のもとに来るだ
ろう。」

「放棄」(saṃnyāsa)とは、結果に対する執着の放棄である。放棄による
ヨーガとは、カルマ・ヨーガのことである。行為の結果(phala)が業
(karma)の束縛であるので、アシュバは善行、アシュバ(aśubha)は悪行で
ある。『バガヴァッド・ギーター』でも行為の結果は、カルマン(karman)
と言われていることがここでわかる。ここでは、カルマ・ヨーガとの関連で
悪行が言われている。

api cet sudurācāro bhajate mām ananyabhak /
sādhur eva sa mantavyaḥ samyag vyavasito hi saḥ // (9.30)

「たとえスドウルアーチャーラ(sudurācāra)¹⁰⁷⁾であっても、もし(クリ
シュナ以外の)他の者を求めず、私(クリシュナ)を信愛すれば、彼は
必ず善人(sadhu)と考えられるべきである。なぜなら、彼は正しい決
定をしたからである。」

スドウルアーチャーラ(sudurācāra)は、直訳すれば「非常に悪いことを
行う者」という意味になる。ここでは、善人(sadhu)と対比されられてお

り、悪人である。ここでは、信愛の手段 (bhakti-yoga) との関連で悪人が言われている。

mām hi pārtha vyapāśritya ye 'pi syuḥ pāpayonayaḥ /
striyo vaiśyās tathā śūdrās te 'pi yānti parām gatim // (9.32)

「なぜなら、プリターの子よ、悪い母胎からの者¹⁰⁹⁾ (pāpa-yonin)、女、ヴァイシヤ、シュードラであつても、私に帰依して、最高の道 (解脱) を行くからである。」

「悪い母胎からの者」とは、前世で悪行の結果を積み、それを持って生まれてくる者という意味であろう。ここでのパーパ (pāpa) は悪である。ここでは、輪廻との関連で悪が言われている。

yo mām ajam anādiṃ ca vetti lokamaheśvaram /
asaṃmūḍhaḥ sa martyeṣu sarvapāpaiḥ pramucyate // (10.3)

「私 (クリシュナ) を再び生まれて来ない者、始まりのない者、世界の偉大な自在神であると知る者は、この人の世で、迷いなく (思慮深く)、すべてのパーパ¹¹¹⁾ (pāpa) から解放される。」

「再び生まれて来ない者」とは、輪廻しない者のことである。クリシュナの本質を知っているとは、どういうことであろうか。クリシュナはヴィシュヌ神の化身であり、神を知るものとは解脱した者のことである。解脱のために解放されるのは、悪行の結果からである。パーパ (pāpa) は悪行の結果である。ここでは、解脱との関連で悪行の結果が言われている。

yo na hr̥ṣyati na dveṣṭi na śocati na kāṅkṣati /
śubhāśubhāparityāgī bhaktimān yaḥ sa me priyaḥ // (12.17)

「喜ばず、憎まず、悲しまず、望まず、シュバとアシュバ¹¹²⁾ (śubha-
aśubha)¹¹³⁾ を捨て、信愛を持つ者、彼は私の愛する人である。」

相対を捨てること、つまりカルマ・ヨーガ (karma-yoga) の実践と信愛 (bhakti) を持つことが勧められている。カルマ・ヨーガにおいては、善悪両方の結果に対する執着を捨てねばならない。シュバ (śubha) は善い行為の結果であり、アシュバ (aśubha) は悪い行為の結果である。ここでは、カ

ルマ・ヨーガと信愛の手段（バクティ・ヨーガ）との関連で悪行の結果が言われている。

indriyārtheṣu vairāgyam anahamkāra eva ca /
janmamṛtyujarāvyaḍhiduḥkhadoṣanudarśanam // (13.8)

「感官の諸対象における欲望を離れ、決して我執がなく、生・死・老・病・苦というドーシャ¹¹⁴（doṣa）を観察し、」

生（janma）、死（mṛtyu）、老（jarā）、病（vyādhī）、苦（duḥkha）がドーシャ（doṣa）であると言われている。これらはすべて克服すべき、もしくは脱出すべきものであり、悪¹¹⁵である。ドーシャは悪である。「感官の諸対象における欲望を離れ」と言われているので、ここではカルマ・ヨーガとの関連で悪が言われている。

puruṣaḥ prakṛtiṣtho hi bhūṅkte prakṛtijaṅ guṇān /
kāraṇaṃ guṇasaṅgo 'sya sadasadyonijanmasu // (13.21)

「なぜなら、物質原理（プラクリティ）のなかにある精神原理（プルシヤ）は、物質原理から生じた要素（グナ）を享受するからである。この要素との結合が、サットとアサット¹¹⁶（sat-asat）の母胎から生まれるとき¹¹⁷の原因である。」

第9章32頌（pāpa-yonayaḥ）では、アサット¹¹⁸（asat）の代わりにパーパ（悪い）という語が使われていた。したがって、ここでのアサットはヨーニン（yonin）の形容詞であり、「悪い」という意味である。ここでは、輪廻との¹¹⁹関連で悪が言われている。

nirmānamohā jitasāṅgadoṣā adhyātmanityā vinivṛttakāmāḥ /
dvandvair vimuktāḥ sukhaduḥkhasaṃjñair gacchanty amūḍhāḥ padam
avyayaṃ tat // (15.5)

「傲慢さと妄想がなく、執着というドーシャ¹²⁰（doṣa）を克服し、常に最高のアートマンを持ち、欲望を捨て、楽・苦として知られる相対論から解放され、迷いのない人々は、この不滅の場所に行く。」

執着はカルマ・ヨーガにおいて捨てるべきものであり、悪行の原因、もし

くは悪である。ここでのドーシャ (doṣa) は悪である。ここでは、カルマ・ヨーガと解脱（不滅の場所に行く）との関連で悪が言われている。

kāmaṃ aśritya duṣpūraṃ dambhamānamadānviṭaḥ /

mohād gṛhītvasad grāhān pravartante 'śucivrataḥ // (16.10)

「彼らは、満たし難い欲望に耽り、偽善と傲慢と慢心を持ち、妄想からのアサット¹²¹⁾ (asat)¹²²⁾ の考えを持ち、不浄 (aśuci) な習慣を持って、行動する。」

アサット (asat)¹²³⁾ は、欲望、偽善、傲慢、慢心、不浄と並列されている。アサットは、グラールハ (grāha, 考え) の形容詞であり、「悪い」という意味である。

tān ahaṃ dviṣataḥ krūrān saṃsāreṣu narādhamān /

kṣipāmy ajasram aśubhān āsurīṣv eva yoniṣu // (16.19)

「憎しみをもち、無慈悲であり、下劣な人間であり、アシュバたち¹²⁴⁾ (aśubha)¹²⁵⁾ を私は輪廻の中に、まさに魔的な母胎に、絶えず投げ入れる。」

輪廻 (saṃsāra) を繰り返す人間とは、悪行の結果を持つ人間のことである。アシュバ (aśubha) は悪行の結果を持つ者である悪人である。ここでは、輪廻との関連で悪人が言われている。

tyājyaṃ doṣavad ity eke karma prāhur maṅṅiṣiṇaḥ /

yajñadānatapaḥkarma na tyājyaṃ iti cāpare // (18.3)

「ある智者たちは『ドーシャ¹²⁶⁾ (doṣa) を持つから、行為は捨てられるべきである』と、他の者たちは『祭祀・布施・苦行という行為は捨てられるべきでない』と言う。」

ドーシャを持つ行為は、祭祀、布施、苦行と対比させられており、捨てられるべきものと言われる。最終的に捨てられるべきものは悪行の結果である。ドーシャ (doṣa) は悪行の結果である。ここでは、行為 (karman) との関連で悪行の結果が言われている。

na dveṣṭy akuśalaṃ karma kuśale nānuṣajjate /

tyāgī sattvasamāviṣṭo medhāvī chinnaśaṃsayāḥ // (18.10)

「純性に満ち、疑惑を断ち、賢明である捨離者は、¹²⁷⁾アクシャラ¹²⁸⁾
(¹²⁹⁾akuśala)の業を嫌わず、クシャラ¹³⁰⁾(kuśala)の場合〔でも〕執着しない。」

クシャラ (kuśala) という語は第2章50頌において用いられており、「ヨーガは行為するときの技術である」(yogaḥ karmasu kauśalam)と言われている。そこでは技術という意味であった。しかし、ここではクシャラは善であり、それに否定辞がついたアクシャラは悪である。ここでは、第2章50頌と同じくカルマ・ヨーガ (karma-yoga) との関連で悪が言われている。

yayā dharmam adharmaṃ ca kāryaṃ cakāryam eva ca /

ayathāvat prajānāti buddhiḥ sā partha rajasī // (18.31)

「¹³¹⁾法 (dharma) と¹³²⁾アダルマ (adharma)¹³³⁾、必ずなされるべきこととなされるべきでないことを誤って判断する知性は、プリターの子よ、激性的である。」

ここでの法とアダルマは、第1章40、41頌、そして第4章7頌での内容と同じであると考えられる。つまり、法は、教典において書かれた祭祀の実行による果報であり、アダルマは、それを実行しないことによる悪影響である。アダルマは、悪い行為の結果であると考えられる。ここでは祭祀 (yajña) との関連で悪行の結果が言われている。

adharmaṃ dharmam iti yā manyate tamasāvṛtā /

sarvārthan viparītāṃś ca buddhiḥ sā partha tāmasī // (18.32)

「¹³⁴⁾アダルマ (adharma) を¹³⁵⁾法 (dharma) と考え、暗性に覆われ、すべての対象物を倒錯する知性は、プリターの子よ、暗性的である。」

ここでのアダルマは、前頌と同じ意味内容を持つ。アダルマは、悪行の結果である。ここでも祭祀 (yajña) との関連で悪行の結果が言われている。

śreyān sva dharmo viguṇaḥ paradharmāt svanuṣṭhitāt /

svabhāvanīyatam karma kurvan nāpnoti kilbiṣam // (18.47)

「不完全な自分の義務は、よくなされた他人の義務よりもすぐれている。」

自分の状態（本質）によって定められた行為をなす者は、キルビシャ¹³⁶⁾
(kilbiṣa) を得ない。¹³⁷⁾

結果に執着せず、自分の義務を実行するときには、悪行の結果は残らない。キルビシャ (kilbiṣa) は悪行の結果である。ここでは、自己の本務 (svadharma) の遂行との関連で悪行の結果が言われている。

sahajaṃ karma kaunteya sadoṣaṃ api na tyajet /
sarvārambhā hi doṣena dhūmenāgnir ivāvṛtaḥ // (18.48)

「[自分の誕生と] ともに生まれた行為は、クンティーの子よ、ドーシャ¹³⁸⁾ (doṣa) を持っても捨てるべきではない。なぜなら、すべての行為の始まりは、ドーシャ¹³⁹⁾ (doṣa) によって覆われているからである。火が煙によって [覆われて] いるように。」

人が生まれながらにして持っているもの、それは悪行の結果である。前世で悪行の結果を滅し切れていないからこそ再び生まれてくるのである。ドーシャ (doṣa) は悪行の結果である。ここでは、輪廻 (saṃsāra) との関連で悪行の結果が言われている。

sarvadharmān parityajya mām ekaṃ śaraṇaṃ vraja /
ahaṃ tvā sarvapāpebhyo mokṣayiṣyāmi mā śucaḥ // (18.66)

「すべての法を捨てて、私ひとりに帰依しなさい。私はあなたをすべてのパーパ¹⁴⁰⁾ (pāpa)¹⁴¹⁾ から解放させるだろう。嘆き悲しむな。」

最後は最初と同じ語である「パーパ」である。解脱 (mokṣa) のために何から解放されねばならないのか。それは悪行の結果である。ここでは、クリシュナに対する帰依 (śaraṇa), 信愛の手段 (bhakti-yoga), 解脱 (mokṣa) との関連で悪行の結果が言われている。

Ⅳ ま と め

『バガヴァッド・ギーター』において、悪を内容とする語は行為の結果としての業の束縛による輪廻からの解脱の手段との関連のなかで用いられていることがわかった。『バガヴァッド・ギーター』は輪廻 (saṃsāra) からの解

脱 (mokṣa) を目指す書である。解脱を阻害する、行為 (karman) の結果としての業 (karman) の束縛からの解放を視点に据えれば、悪とは解脱を阻害する要因としての悪行の結果を持つことである。従来の現代語で罪 (sin) と訳されてきた単語の具体的な内容は悪行の結果である。悪い行為の結果として、罪がやってくる。その罪は輪廻の原因 (kāraṇa, hetu, bīja) であり、解脱の阻害要因であり、悪行の結果である。罪の内容は悪行の結果である。パーパ (pāpa), ドーシャ (doṣa), アシュバ (aśubha) は、悪行の結果を内容とする場合が多く、キルビシャ (kilbiṣa), カルマシャ (kalmaṣa), アダルマ (adharma) の内容はすべて悪行の結果であった。従って、『バガヴァッド・ギーター』における倫理は、社会的秩序を目指すものではなく、個人の解脱を目指すものである。本稿において、これらの点が確認された。

- 1) 『バガヴァッド・ギーター』のサンスクリット・テキストとして、*The Mahābhārata*, vol. 7 *The Bhīṣmaparvan*. Critically Edited by S. K. Belvalkar, Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1947 を用いる。さらに、シャンカラ註をはじめとする諸註釈書については、*Śrīmadbhagavadgītā with the Commentaries Śrīmat-Śākarabhāṣya with Ānandagiri; Nīlakaṇṭhī; Bhāṣyotkarṣadīpikā of Dhanapati; Śrīrdharī; Gītārthasaṃgraha of Abhinavaguptācārya and Gūḍharthadīpikā of Madhusūdana with Gūḍharthattatvaloka of Śrīrdharamadattaśarma (Bachchāśarma)*, Edited by Wasudev Laxman Śāstrī Panśīkar, Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers Pvt Ltd., 1996 を用いる。
- 2) 悪についての研究としては、中村元「悪」、雲井昭善「善悪応報の思想—インド一般思想として—」、藤田宏達「原始仏教における悪の観念」、『仏教思想 2 悪』(平楽寺書店1976) pp. 1-88, pp. 89-114, pp. 115-156 などがある。また、『バガヴァッド・ギーター』の倫理観についての研究として、辻直四郎「道徳」『バガヴァッド・ギーター』(講談社、東京、1980) pp. 382-391; 西尾秀生「バガヴァッド・ギーターの倫理と仏教」、『社会倫理と仏教の機能』(日本仏教学会、平楽寺書店、京都、1983) pp. 1-14 などがある。
- 3) 1.36, 1.39, 1.45, 2.33, 2.38, 3.13, 3.36, 4.36, 5.10, 5.15, 6.9, 7.28, 9.20, 9.32, 10.3, 18.66
- 4) 1.38, 1.39, 1.43, 2.7, 13.8, 15.5, 18.3, 18.48, 18.48
- 5) 2.57, 4.16, 9.1, 9.28, 12.17, 16.19
- 6) 4.30, 5.17, 5.25, 6.27, 6.28
- 7) 1.40, 1.41, 4.7, 18.31, 18.32

- 8) 3.13, 4.21, 6.45, 18.47
- 9) 3.13, 3.16 また、「アガ」に否定辞がついた「アナガ」(anagha) は 3 例あり、アルジュナに対する呼びかけとして用いられている。3.3, 14.6, 15.20
- 10) 3.37, 3.41
- 11) 1.38
- 12) 4.36
- 13) 18.10
- 14) 4.8, 2.50, 7.15
- 15) 9.30
- 16) 6.40
- 17) 2.16, 9.19, 11.37, 11.42, 13.12, 13.21, 16.8, 16.10, 17.22, 17.29
- 18) 17.26-28
- 19) Edgerton, F. *The Bhagavad Gita*, pt. 1 & 2. Harvard Oriental Series, vol. 38 & 39. Cambridge, Mass. 1944.
- 20) Zaehner, R. C. *The Bhagavad Gita: with a Commentary based on the Original Sources*. Oxford University Press, 1969.
- 21) 辻直四郎『バガヴァッド・ギーター』講談社, 東京, 1980
- 22) 上村勝彦『バガヴァッド・ギーター』岩波文庫, 東京, 1992
- 23) 鎧淳『完訳 バガヴァッド・ギーター』中公文庫, 東京, 1998
- 24) Edgerton, “evil”; Zaehner, “evil”; 辻「罪悪」, 上村「罪悪」, 鎧「罪過」。
- 25) Edgerton, “sin”; Zaehner, “wickedness”; 辻「罪過」, 上村「罪」, 鎧「罪咎」。
- 26) tad doṣaśabditaṃ pāpaṃ ... / (*Ānandagīrivyākhyā*, p. 26) 「この過失と呼ばれる悪を」
- 27) Edgerton, “crime”; Zaehner, “crime”; 辻「悪行の結果」, 上村「罪悪」, 鎧「悪行の結果」。
- 28) Edgerton, “wickedness”; Zaehner, “wickedness”; 辻「罪悪」, 上村「罪」, 鎧「咎」。
- 29) Edgerton, “sin”; Zaehner, “evil thing”; 辻「罪過」, 上村「罪悪」, 鎧「罪過」。
- 30) Edgerton, “holy laws”; Zaehner, “laws”; 辻「法」, 上村「美德」, 鎧「法」。
- 31) kulasya hi kṣaye kulasambandhinaś cirantanā dharmās tattadagnihotrādikriyasādhyā nāśam upayānti / (*Ānandagīrivyākhyā*, p. 27) 「実に、一族が消滅にすると、一族〔という語〕の連結語であり、古来から続いている、法は、〔つまり〕それぞれの供火祭などの行為の結果は、消滅する。」
- 32) Edgerton, “lawlessness”; Zaehner, “lawlessness”; 辻「非法」, 上村「不徳」, 鎧「非法」。
- 33) śastracoditasya nityasya karmaṇo 'nanuṣṭhānād buddhyavasthas tamo 'vayava aśayatam pratipanno' dharmah / sa cāpi dvividhaḥ/ aniṣṭaśarīrendriyaṣayopabhoganirvartakaḥ khyativarakaś ca / (YD ad SK 23, *Yukti-*

- dīpikā*, Critically ed. by Albrecht Wezler and Shujun Motegi, vol. 1, Alt-und Neu-Indische Studien, Band 44, 1998, p. 193.) 「教典に命じられた〔諸行為と〕日常的な諸行為（祭祀）とが実行されないことから、統覚にある暗性の部分が指向力を得たものが、非法である。それは二種類である。望ましくない身体の感官の対象の享受をもたらすものと、知を覆うものとのである」村上真完「サーンクヤ哲学における業の問題—ヴァイシェーシカ哲学とも関連して—」『業思想研究』雲井昭善編，平楽寺書店，京都，1979. p. 550 参照。
- 34) Edgerton, “lawlessness”; Zaehner, “lawlessness”; 辻「非法」，上村「不徳」，鍔「非法」。
- 35) Edgerton, “sins”; Zaehner, “evil ways”; 辻「罪過」，上村「罪過」，鍔「罪咎」。
- 36) Edgerton, “wickedness”; Zaehner, “evil deed”; 辻「罪惡」，上村「大罪」，鍔「大罪」。
- 37) *kārṇyaṃ dainyaṃ ... / (Ānandagīrīvyaḥyā*, p. 36)
- 38) Edgerton, “taint”; Zaehner, “harmful taint”; 辻「過誤（迷妄）」，上村，訳出されず，鍔「罪」。
- 39) *doṣāś ca svakulakṣayakṛtaḥ ... / (Śrīdhārīvyaḥyā*, p. 36) 「過失とは、自分の一族の殺戮を行うことである」
- 40) *vasāmsi jīrṇāni yathā vihāya navāni gṛhṇāti naro 'parāṇi / tathā śarīrāṇi vihāya jīrṇāny anyāni samyati navāni dehī // (BhG 2. 22)* 「人が古い服を捨てて、新しい他の〔服〕を着るように、魂（デーヒン）は古い身体を捨てて、新しい他の〔身体〕に入る。」
- 41) Edgerton, “evil”; Zaehner, “evil”; 辻「不祥」，上村「罪惡」，鍔「罪過」。
- 42) Edgerton, “evil”; Zaehner, “evil”; 辻「不祥」，上村「罪惡」，鍔「罪過」。
- 43) Edgerton, “evil deeds”; Zaehner, “evil works”; 辻「悪行の結果」，上村「悪業」，鍔「悪業」。
- 44) *sukṛtaduṣkṛte puṇyapāpe ... / (Śāṅkarabhāṣya*, p. 110)
- 45) *sukṛtaduṣkṛte karmayogī jahāti ... / (Nīlakaṇṭhāvyaḥyā*, pp. 110-111) 「カルマ・ヨーガの実行者は、善業と悪業を捨てる。」
- 46) *phalakāmaṇaṃ tyaktvā ... / (Madhusūdhānīvyaḥyā*, p. 111) 「結果に対する欲望を捨て」
- 47) Edgerton, “good or evil”; Zaehner, “good ...bad”; 辻「浄・不浄」，上村「善惡」，鍔「浄不浄」。
- 48) *śubhaṃ sukhaheṭuṃ viṣayam ... aśubhaṃ duḥkhaheṭuṃ viṣayam ... / (Madhusūdhānīvyaḥyā*, p. 118) 「浄，〔つまり〕楽の原因としての対象を……不浄，〔つまり〕苦の原因としての対象を」
- 49) Edgerton, “sins”; Zaehner, “taint”; 辻「罪惡」，上村「罪惡」，鍔「罪垢」。
- 50) *sarvakilbiṣaiḥ sarvapāpaiś ... / (Śāṅkarabhāṣya*, p. 151)
- 51) Edgerton, “wicked men”; Zaehner, “evil”; 辻「悪人」，上村「悪人」，鍔「邪

悪の徒」。

- 52) Edgerton, “evil”; Zaehner, “evil”; 辻「罪垢」, 上村「罪」, 鎧「罪穢」。
- 53) Edgerton, “malignant”; Zaehner, “living an evil life”; 辻「罪惡」, 上村「罪ある人」, 鎧「穢れし」。
- 54) aghāyuh pāpajīvana iti ... / (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 154)
- 55) Edgerton, “sin”; Zaehner, “evil”; 辻「罪惡」, 上村「惡」, 鎧「邪惡」。
- 56) ayam pāpaṁ karma caraty ācarati puruṣaḥ ... / (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 172) 「この人間は、悪い行為を行う、〔つまり〕行う。」
- 57) Edgerton, “very sinful”; Zaehner, “mightily wicked”; 辻「大邪惡」, 上村「非常に邪惡」, 鎧「兇惡のもの」。
- 58) Edgerton, “evil one”; Zaehner, “evil thing”; 辻「邪惡者」, 上村「邪惡なもの」, 鎧「極惡のもの」。
- 59) pāpmānaṁ pāpacāraṁ kāmaṁ ... / (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 177) 「パープマンを、〔つまり〕悪い行為を、欲望を」
- 60) Edgerton, “right”; Zaehner, “law of righteousness”; 辻「正法」, 上村「美德(正法)」, 鎧「正法」。
- 61) dharmasya glānir hānir varṇāśramādilakṣaṇasya prāṇinām abhyudayaniḥśreyasasādhanaṁ ... / (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 190) 「法の減少 (glāni), 〔つまり〕種姓の秩序などを特徴とするもの、生き物たちの繁栄と至福を成立させるもの、の減少 (hāni)」
- 62) Edgerton, “unright”; Zaehner, “lawlessness”; 辻「非法」, 上村「不徳」, 鎧「非法」。
- 63) adharmaṁ vedanīśiddhasya nānāvīdhaduḥkhasādhanaṁ dharmavirodhinaḥ ... / (*Madhusūdanīvyākhyā*, p. 190) 「非法 (adharma) の、〔つまり〕ヴェエータ〔に書かれたことの実行〕の否定の、さまざまな種類の苦を成立させるものの、法と矛盾するものの」
- 64) Edgerton, “evil-doers”; Zaehner, “evil-doers”; 辻「邪惡者」, 上村「悪人」, 鎧「悪行の結果のものたち」。
- 65) duṣkṛtāṁ pāpakāriṇāṁ / (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 191) 「悪行者たちの、〔つまり〕悪い行為を持つ者たちの」
- 66) Edgerton, “evil”; Zaehner, “ill”; 辻「不浄(輪廻)」, 上村「不幸」, 鎧「不浄」。
- 67) aśubhāt saṁsārāt // (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 199) 「不浄から、〔つまり〕輪廻から。」
- 68) Edgerton, “guilt”; Zaehner, “defilement”; 辻「罪」, 上村「罪」, 鎧「罪垢」。
- 69) kilbiṣaṁ saṁsāraṁ ... / (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 212) 「罪を、〔つまり〕輪廻を」
- 70) Edgerton, “sins”; Zaehner, “defilements”; 辻「汚濁」, 上村「罪障」, 鎧「罪障」。
- 71) kalmaṣaṁ pāpaṁ ... / (*Madhusūdanīvyākhyā*, p. 228)

- 72) Edgerton, “sinners”; Zaehner, “evil-doers”; 辻「悪人」, 上村「悪人」, 鎧「悪人」。
- 73) pāpebhyāḥ pāpakṛdbhyaḥ ... / (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 233) 「諸悪から、〔つまり〕悪を行う者たちから」
- 74) Edgerton, “worst sinner”; Zaehner, “very worst”; 辻「最悪の人」, 上村「最も悪人」, 鎧「極悪非道のもの」。
- 75) Edgerton, “evil”; Zaehner, “tortuous”; 辻「罪」, 上村「罪」, 鎧「罪障」。
- 76) vṛjinaṃ vṛjinārṇavaṃ pāpaṃ ... / (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 233) 「ヴリジナを、〔つまり〕悲惨な海である悪を」
- 77) Edgerton, “evil”; Zaehner, “evil”; 辻「罪悪」, 上村「罪悪」, 鎧「罪過」。
- 78) Edgerton, “sin”; Zaehner, “evil works”; 辻「罪悪」, 上村「罪悪」, 鎧「罪過」。
- 79) puṇyadilakṣaṇaṃ yāgadānahomādikāṃ ca sukṛtaṃ ... / (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 262) 「神に対する崇拝などを特徴とし、そして供犠、布施、護摩をはじめとする善行を」
- 80) Edgerton, “sins”; Zaehner, “taints”; 辻「罪垢」, 上村「罪障」, 鎧「罪障」。
- 81) kalmaṣāḥ pāpādisaṃsārakāraṇadoṣāḥ ... / (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 265) 「罪は、〔つまり〕悪など輪廻の原因としての過失は」 kalmaṣaṃ mūlajñānaṃ saṃsāra-brjābhūtaṃ ... / (*Nilakanṭhavyākhyā*, p. 235) 「罪を、〔つまり〕根本的な無知 (ajñāna) であり、輪廻の種子となるものを」
- 82) apunar avṛttim apunar dehasaṃbandhaṃ ... / (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 264) 「再び生まれ変わることはない、〔つまり〕再び身体の束縛がない」
- 83) punar dehasaṃbandhakāraṇaṃ kalmaṣaṃ puṇyapāpātmakaṃ karma ... / (*Madhusūdanavṛyākhyā*, p. 265) 「再び身体を束縛する原因である罪であり、善悪を本質とする業 (カルマン) を」
- 84) Edgerton, “sins”; Zaehner, “taint-of-imperfection”; 辻「罪垢」, 上村「罪障」, 鎧「罪障」。
- 85) kṣīṇakalmaṣāḥ kṣīṇapāpādidosaḥ ... / (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 275) 「消滅したカルマシヤは、〔つまり〕消滅した悪など過失は」
- 86) yajñādinityakarmānuṣṭhānāt pāpādilakṣaṇaṃ kalmaṣaṃ kṣīyate ... / (*Ānandagirivṛyākhyā*, p. 275) 「祭祀など常に行為を行っているから、悪などを特徴とする罪が消える」
- 87) sādhuṣu śāstrānuvartīṣu ... / (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 293) 「善人において、〔つまり〕聖典に従う者たちにおいて」 sādhuṣu puṇyakṛtsu ... / (*Nilakanṭhavyākhyā*, p. 294) 「善人において、〔つまり〕善を行う者において」
- 88) Edgerton, “evil men”; Zaehner, “the evil”; 辻「悪人」, 上村「悪人」, 鎧「悪人」。
- 89) pāpeṣu pratīṣiddhakāriṣu ... / (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 293) 「悪において、〔つまり〕教典に書かれたことの実行を」 否定する者において pāpeṣu pāpacāreṣu ...

- / (*Nilakaṇṭhavyākhyā*, p. 294) 「悪において, [つまり] 悪行者において」
- 90) Edgerton, “stainless”; Zaehner, “free from [all] stain”; 辻「罪障なき」, 上村「罪障のない」, 鎧「罪障なく」。
- 91) akalmaṣaṃ dharmādharmādivarjitam // (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 314) 「罪のない, [つまり] 法と非法などを捨てた。」 シャンカラは, カルマシャ (罪) の内容を法と非法と解釈し, 解脱のためには非法だけでなく法までも捨てねばならないと考えていたようである。サーンキヤ学派では, 法・非法は行為の結果と考えられていた。(村上真完「サーンキヤ哲学における業の問題—ヴァイシェーシカ哲学とも関連して—」『業思想研究』雲井昭善編, 平楽寺書店, 京都, 1979. pp. 535-578参照) 解脱の妨げになる行為の結果は, 善であれ悪であれ罪なのである。たとえば, 註釈者マドゥスーダナも次のように言う。
- saṃsārahetudharmādharmara... / (*Madhusūdanavyākhyā*, p. 314) 「輪廻の原因である法と非法」この考えは, サーンキヤ学派の主張と矛盾しない。たとえば, 『サーンキヤ・カーリカー』では次のように言われている。 dharmeṇa gamanam ūrdhvaṃ / gamanam adhastād bhavaty adharmeṇa / jñānena cāpavargaḥ / viparyayaḥ iṣyate bandhaḥ // (SK44, *Yuktidīpikā* 1998, pp. 235-236) 「法によって向上が, 非法によって向下がある。そして, 知識によって解脱が, 反対(無知)から[業の]束縛が認められる」村上真完『サーンキヤ哲学研究—インド哲学における自我観—』(春秋社, 東京, 1978) p. 652 参照。
- 92) Edgerton, “stain”; Zaehner, “flaws”; 辻「罪障」, 上村「罪障」, 鎧「罪障」。
- 93) vigatakalmaṣo vigatapāpaḥ ... / (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 315) 「消滅した罪を持つ, [つまり] 消滅した悪[業]を持つ」
- 94) Edgerton, “bad end”; Zaehner, “evil path”; 辻「悪趣(地獄)」, 上村「悪趣」, 鎧「悪趣」。
- 95) durgatiṃ kutsitāṃ gatiṃ ... / (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 333) 「ドゥルガティに, [つまり] ひどく悪い道に」
- 96) Edgerton, “sins”; Zaehner, “taint”; 辻「罪」, 上村「罪」, 鎧「罪垢」。
- 97) saṃsuddhakilbiṣo viśuddhakilbiṣaḥ saṃsuddhapāpaḥ ... / (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 338) 「清浄(samsuddha)な罪は, [つまり] 清浄(viśuddha)な罪であり, 清浄な悪は」
- 98) Edgerton, “evil-doers”; Zaehner, “doers of evil”; 辻「悪行をなし」, 上村「悪をなす」, 鎧「悪業のもの」。
- 99) duṣkṛtinaḥ papakāriṇaḥ ... / (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 361)
- 100) Edgerton, “sin”; Zaehner, “ill”; 辻「罪惡」, 上村「罪惡」, 鎧「罪障」。
- 101) Edgerton, “evil”; Zaehner, “ill”; 辻「不浄(悪)」, 上村「不幸」, 鎧「穢悪」。
- 102) aśubhāt saṃsārabandhanāt // (*Śāṅkarabhāṣya*, p. 411) 「不浄から, [つまり] 輪廻の束縛から。」
- 103) Edgerton, “sin”; Zaehner, “fault”; 辻「罪惡」, 上村「罪惡」, 鎧「罪垢」。

- 104) *putapapaḥ śuddhakilbiṣaḥ ... / (Śāṅkarabhāṣya, p. 430)* 「清らかな悪は、〔つまり〕清浄な罪は」
- 105) Edgerton, “good and evil”; Zaehner, “fair and foul”; 辻「好ましき、また好ましからざる」、上村「善悪」、鏝「善悪」。
- 106) *śubhāśubhe iṣṭāniṣṭe ... / (Śāṅkarabhāṣya, p. 436)* 「浄と不浄とは、望まれたものと望まれないものとである」
- 107) Edgerton, “very evil doer”; Zaehner, “evil a man’s livelihood”; 辻「極悪の人」、上村「極悪人」、鏝「極悪無道のもの」。
- 108) *suṣṭhu durācāraḥ sudurācāro ’tīva kutsitācāraḥ ... / (Śāṅkarabhāṣya, p. 438)* 「過度の悪行者 (dur-ācāra) である、スドウルアーチャーラは、非常な悪行者 (kutsita-ācāra) であり、」
- 109) Edgerton, “base origin”; Zaehner, “base born”; 辻「生まれ賤しき者」、上村「生まれの悪い者」、鏝「生まれ悪しき人びと」。
- 110) *pāpayonayaḥ pāpajñmānaḥ / (Śāṅkarabhāṣya, p. 439)* 「悪い母胎を持つ者とは、悪い生まれの者である」。
- 111) Edgerton, “evils”; Zaehner, “evil”; 辻「罪悪」、上村「罪悪」、鏝「罪障」。
- 112) Edgerton, “good and evil (objects)”; Zaehner, “pleasant and unpleasant things”; 辻「好悪」、上村「好悪」、鏝「浄不浄 (のもの)」。
- 113) *śubhāśubhe puṇyapāpe karmaṇī ... / (Śāṅkarabhāṣya, p. 516)* 「浄と不浄、〔つまり〕善と悪の行為の結果 (業) を」 *śubhāśubhe sukhasadhanaduḥkhasādhanē karmaṇī ... / (Madhusūdanavṛyakhya, p. 516)* 「浄と浄、〔つまり〕楽を成立させるものと苦を成立させるものである行為の結果 (業) を」
- 114) Edgerton, “evils”; Zaehner, “what constitutes their worthlessness”; 辻「害悪」、上村「害悪」、鏝「諸悪」。
- 115) *jaraṃaraṇamokṣaya ... / (BhG 7. 29)* 「老と死からの解脱のために」。
- 116) Edgerton, “good and evil”; Zaehner, “good and evil”; 辻「善悪」、上村「善悪」、鏝「善悪」。
- 117) *sadyonayo devādyonayo ’sadyonaya paśvādyonayaḥ / (Śāṅkarabhāṣya, p. 567)* 「善い母胎を持つ者とは、神などの母胎を持つ者である。悪い母胎を持つ者とは、獣などの母胎を持つ者である。」
- 118) Edgerton, “good and evil”; Zaehner, “good and evil”; 辻「善悪」、上村「善悪」、鏝「善悪」。
- 119) *sadasadyoniñjanmasv asya saṃsārasya kāraṇaṃ ... / (Śāṅkarabhāṣya, p. 567)* 「善悪の母胎から生まれるときの、この輪廻の原因を」
- 120) Edgerton, “sin”; Zaehner, “taint”; 辻「欠陥」、上村「害」、鏝「邪悪」。
- 121) Edgerton, “false”; Zaehner, “false”; 辻「不善」、上村「誤った」、鏝「邪見」。
- 122) *asadgrahān aśubhaniścayān ... / (Śāṅkarabhāṣya, p. 642)* 「悪い理解を、〔つまり〕不浄な決定を」
- 123) Edgerton, “false”; Zaehner, “false”; 辻「不善」、上村「誤った」、鏝「邪見」。

- 124) Edgerton, “wicked ones”; Zaehner, “strangers to [all] good”; 辻「憎悪者」, 上村「不浄」, 鍧「不浄」。
- 125) *aśubhān aśubhakarmakāriṇaḥ ... / (Śāṅkarabhāṣya, p. 647)* 「不浄を, [つまり] 不浄な行為を行う者たちを」
- 126) Edgerton, “sinful”; Zaehner, “tainted with defect”; 辻「欠陥」, 上村「過失」, 鍧「罪過」。
- 127) *yāh karmaṇi saṅgam tyaktvā tatphalaṃ ca nityakarmānuṣṭhayī sa tyāgī / (Śāṅkarabhāṣya, p. 687)* 「行為するときに執着とその結果を捨てて, 常に行為を行う人が捨離者である。」
- 128) Edgerton, “disagreeable”; Zaehner, “uncogential”; 辻「好ましからざる」, 上村「望ましくない」, 鍧「得手ならぬ」。
- 129) *akuśalam aśobhanam ... / (Śāṅkarabhāṣya, p. 687)*
- 130) Edgerton, “agreeable”; Zaehner, “cogential”; 辻「好ましき」, 上村「望ましい」, 鍧「得手なる」。
- 131) Edgerton, “right”; Zaehner, “lawful-right”; 辻「法」, 上村「美德」, 鍧「法」。
- 132) Edgerton, “unright”; Zaehner, “lawless-wrong”; 辻「非法」, 上村「不徳」, 鍧「非法」。
- 133) *dharmam śātracoditam adharmaṃ ca tatpratiṣiddham ... / (Śāṅkarabhāṣya, p. 715)* 「法を, [つまり] 教典に命令されたこと(祭祀)を, そして非法を, その(教典に命令されたことの実行の)否定を」。村上 1979, pp. 550-551 参照。
- 134) Edgerton, “unright”; Zaehner, “wrong, lawlessness”; 辻「非法」, 上村「不徳」, 鍧「非法」。
- 135) Edgerton, “right”; Zaehner, “right”; 辻「法」, 上村「美德」, 鍧「法」。
- 136) Edgerton, “guilt”; Zaehner, “defilement”; 辻「罪垢」, 上村「罪」, 鍧「罪垢」。
- 137) *kilbiṣam pāpam // (Śāṅkarabhāṣya, p. 728)*
- 138) Edgerton, “faulty”; Zaehner, “defective”; 辻「欠陥」, 上村「欠陥」, 鍧「咎」。
- 139) Edgerton, “faults”; Zaehner, “defects”; 辻「欠陥」, 上村「欠陥」, 鍧「咎」。
- 140) Edgerton, “evils”; Zaehner, “evils”; 辻「罪悪」, 上村「罪悪」, 鍧「邪悪」。
- 141) *sarvāpēbhyāḥ sarvadharmādharmabandhanarūpēbhyāḥ ... / (Śāṅkarabhāṣya, pp. 753-754)* 「すべての悪から, [つまり] すべての法と非法の束縛というかたちから」。ここでの法(ダルマ)・非法(アダルマ)も, 行為の結果(業)である。
sarvāpēbhyo bandhuvadhādinimittēbhyāḥ saṃsārahetubhyāḥ ... / (Madhusūdhantvīyākhyā, p. 754) 「すべての悪から, [つまり] 束縛という[解脱を]打ち負かすものなどという原因, 輪廻の原因から」
- 142) シャンカラは, 輪廻の原因としての悪行の結果(業)を過失(*doṣa*)と呼ぶ。本稿註81参照。